

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	イプセン劇「幽霊」の梗概及感想（Merejkowski）：雑録
Author(s)	泊草
Citation	龍南會雑誌， 1 3 7： 1 0 4 - 1 2 0
Issue date	1910-11-26
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/6097
Right	

雜 錄

セイ
ンブ 劇「幽靈」の梗概及感想

(MERJKOWSKI)

洎 草

イブセン著作の内『幽靈』は最も幽暗な力強いものゝ一つで、母が己れの自由のためにその子を棄つる最近ノラの上場（「幽靈」は一八八一年の作で一八九九年の作なる「人形の家」に次いで上場せられたる也）に向ひ此の詩人を咎噴せし人々に對して一つの應答を構成してゐる。

有徳な、中庸の見界を有せる、代表者として、嚴格で尊重すべき牧師、高尚なる主義で同事に又小兒らしき迄に飾りなきマシデルスが描述せられてある。彼れは故侍從陸軍大尉の寡婦ヘレン、アルビントがすつゝ以前にノラのやうに自由と Moral purity の爲めにその伉儷を棄てたと云ふので絶えず吐噴する。ヘレンは、それで漸く牧師マンデルスの人格に依て代表されたる社會人の聲に耳を傾け初め遂には家庭の人になりなせて、道德家がノラニに要求するところを精々となし行つた。

彼女はその後半生を善良なる人として暮し、彼の邪惡な父親もその實正直な人であつたと信じさすやうにと小兒の教育に生涯を締め込まうと思つた。社會の尊敬、恭重を克ち得たる家庭と謂ふ骨の折れる虚偽の大層

を飾るために別れたる夫の記念として彼女は壯大なる養育院を建てる。

牧師マンデルスは必要な新紙類持参で獻堂式にやつて来て、ヘレンの過去の生涯を想ひ起し基督教徒の忍耐服従、背戻、などに就て堂々と説教せざるを得なかつた。故郷の爐邊に、家庭に、且つは伉儷に歸せしむる許容せられたる特權は自分にあるのだと説く。

ヘレンは苦笑を漏しながらデット凝視めて

『はい。さうですとも、マンデルスさま。本當それはあなたの御仕事ですわ』

マンデルスは其れに付加へて

『私が貴女の肩に負せてあげた義務の重荷はあなたにとつては一つの助力で、また祝福でねこの證明ではありませんか。それが後生涯の光ともなりませうよ。』
また。

『慙く、慙く、私が預言した通りではなかつたのですか、アルビング君は怒りもせず正直な道にかへつて、納得したぢありませんか。彼男はそれから仲好く一所に暮して近隣の施恩者になりましたね彼の手助でも出来るやうに御慈仁にもして呉れたのでそれから段々と企業に加勢が出来たちありませんか——最都合の手助者として。ね、アルビングの奥さん俺しや何でも知つてゐるのですよ。此の名譽は貴女に相當なものだ。而しまだ貴女の生涯の別な最も怕しい誤謬に就て御話しなければなぬ』

斯くして北國の朝の冷やかなる光を浴びせながら單調なる調子で説教が繰出されたのである。

次の戸なる養橙所の窓を通して陰暗なる山川の景色はいくらか明るくなつたものと兩岸峻峭なる凡ての峽瀨は倦ます降り暮る雨滴の霧に封せられた。

厳しき道德家は續くる。

『貴女。貴女の生活は爲我心と背叛の精神に導かれ貴女の標的は不法則で、眼を打毀しては盲目にする怕ろしい物になみならぬ鎖で繋がれてゐらつしやる。それに始終ごの道からでも切つて出やうと想てゐいます。』

なんでもかでも生活を苦めるものは不必要な荷物のやう疑懼もなく深い考もなしに投棄て、結婚は最早嫌しいことでもなかつたので離縁はするし、母としての心配は遠慮なく壓倒するので肉身の子供は外國に送られたのですね』

また、古風めいた教會堂で彼は女に向ひ指を振り教師としての威權を保らながら説き出す。

『アルビングの奥さん。明らさまに飾りつこなしに言つてしまへば、貴女は極く極く好くないた母さんですよ』

是に批評家がノラに向つて放つたる同じき罪狀が述べられる。ヘレンは最早此に至つて我慢しきれなくなへた。彼女は實際多くの人の大なる名譽と尊敬とを有する故侍従は私の家庭生活を毒する、道樂者で酒飲者であつたと告げる。

『妾は家で何麼ことが起つた位端然と承知しながら苦悶してゐます』

『一對何麼譯です。家では？』

『此處です。此の壁の内です。妾はあの外部で（扉を指しながら）初めて何でも覗知りました。丁度妾が合堂に何か取りに行かうとしてゐた時分です。扉が半分程あいてゐて、花に水をやり庭園から料理女の（レツナ）（の實母）歩んで来る足音が好く聞われました。』

『さうそれから？』

『暫くたつて妾は夫のアルビングの足音がして女に低聲で話してゐるのが耳に入りました。そして——（苦笑を漏しながら）ねえまだその聲が妾の心を片々に劈いて嘲笑つてゐるやうな其麼言葉が耳に入つたかと思ふと總て料理女の囁く聲音。ねえしなさい。打ちやつてた置きなさいつて。』

マンデルスは猶、か弱くも悶いてゐる。彼は煩雜なるものの讓和をその道德上の信條に求めてゐる。彼は主アルビングの行爲を許す可からざる兒戲を呼びヘレンは彼に對する總ての路を徂遏する。LIAISON は料理人と共に結末を獲得したのである

『妾は大分此の家で惱まされました。夕方彼を引留めて置きますと夜になつては親しい友達になれと謂へて酒を強いられ、唯一人酔しれの囁言を聞かされたのです。傍に眼と眼と向き合せて杯を鳴らしてはのみ、凡庸な感興のねい瑣々事を耳にして揚句の果はあるだけの力を振つて寢床に引入なくてはなりませんでしたわ。……』

讀者は、理想家で義務とか棄權とかの論議に煮染でゐる白髮の小兒で、又周章狼狽して驚聲を發するやうな全く實生活の理解を缺でゐるマンデルスの赤裸々で喜劇的な當惑の顔を畫くことができやう。

『頭が渦卷て眼迷がするやうです。そうすると貴女お嬢の結婚、貴郎との長い間の結婚は他人には見ぬ一つの大きな裂罅でしたね』

『全くあなたは御承知で被居りますこと——』

『而し、それはどうしても了解ません。私には不可能なことです！』

ヘレンアルピングの家には故侍従の私生女兒のレジナと料理人と近頃以太利亞から歸つて來たヘレンの子オスワルドなる美術家とが住むてゐる。

絶まない雨はオスワルドを壓しつけるやうに苦めた。彼はとても故郷のこんな冷やかな灰色の空に親むこゝは出來なかつた。母は色々と彼の子の面倒を見てやつたのだから彼の父の邪惡な傾向が顯はれ初めたのをめ認ては日に増す懸念に沈んだ。オスワルドは酒を飲み初め種々と悶いてはじれたくもなつた。克己の心もなく唐突不穩な氣質の發作をも蔽ふとはしなかつた。此の劇中の性格を壓迫する總ての力は即遺傳性の避く可ざる力である。家庭生活の罅隙を蔽はんとする虚偽及父君の罪惡に對しての應報が第一幕の最後の舞臺に於て演ぜらるゝのである。

猶續いて雨降の朝の薄暗い光の中でヘレン、とマンデルスとの退屈な會話。

女は自分を慰め顔に曰ふ、

『それから二日経つてね、^{たたく}妾あ彼は死だもので實際決して此の家に住でないと云ふことを考へるようになりましたわ。此には妾の子とその母さんだけの外に誰も住つてはゐません』

食堂から椅子の轉覆した音と同時に嘔く聲音。

レジナの聲音『嘔ではあるものと明亮に』オスワルドさまあなたはまあ氣でもた狂ですかへ。打棄てて置なさりまし！』

ヘレン『（恐れ震ひながら）ねえ、まあ……………（亂心せしものやう半ば開いた戸を通じて凝視すオスワルトは咳嗽しフツフと息をつき初め鑊のコルクを抜く音聞ゆ）

マンデルス『（非常に震ひながら）一体どうしたのです奥さん。何と御思ひですか？』

ヘレン『幽霊です温室の二人が復生したのです』

マンデルス『何處譯てす……………レジナ？ レジナでせうか。どうしてあの女が——（ヘレンは牧師マンデルスの手をとつて半は落ちこちながら食堂に急ぎ入る）』

第二幕でアルピング夫人は目新らしくもない花で飾られた室で惚れ合つた夫婦が著じるしい罪な行爲を経験したことに就ての恐怖の感情を白狀する女は云ふ

『妾は不決斷で其の上臆病者です。レジナとオスワルドとの嘔きが耳に入つた時に私は眼の前に幽霊の姿が浮んだやうに思はれましたのです。牧師マンデルスさま、また妾は吾々は皆な幽霊ぢあないかと思ひます。それは妾らの心の中を歩むである父や母やの遺傳ばかりでなく總ての死んだ理想や古い活氣ない信仰

やなにやです。活氣はありませんがどれもこれも妾らに纏著して振放つこともできません。また何麼新聞を取上げてても其のラインの間に幽霊が光つて見えます、この幽霊はいたるところ濱の眞砂のやうに澤山のるに相違ありません、そして誰れも彼れも吾々は憐憫にも光を恐るゝのです』

世の中の凡ての物が幽霊である。此の幽霊が一見堅固で實際不安な、現在社會の基礎である、マन्दルスが説く所の義務や棄權の原理も亦幽霊である。

ヘレンは言ふ『はい——貴君が義務や責務の轡を御強いになると一所に厭な物だと妾の精神が叛ふ持前の權利を褒めさへた呉れになれば御教義の縫目からでも覗き申しますわ。妾は一つの結目を取りたいと思ひましたかそれを取る内に總てがほごけて終まつたのです。それで是れは機械縫と感付たのですよ』

ヘレンは自身の生活に絡つた虚偽の“machine-made mesh”をきれ／＼に破らんと務めた。女は明ら／＼にマन्दルスに對してその永久の苦痛であり服従である所の持論に對して反對の位置に立つた。

彼女はその子オスワルドが巴里の有名なる醫師が父の放蕩の結果として彼の體質に遺傳性狂癲の幻芽然らずんば少なくとも神經的傾向を發見したと云ふことを白狀した時に、またオスワルドが同じ父の子であるレジナとの戀に陷つて唯此の病的なる戀愛のみが彼の子の狂癲と失望とからして免れしむるを得ると認めた時にヘレンは手づからレジナをオスワルドに興へふうとしたのである。そして

『貴女はさうする權利はたもあてない』とのマन्दルスの怒れる叫に平氣で穩やかに『妾の望んでゐるものには甚麼權利でもありますわ』と答へたのである。

窓を通して空は赤く輝いた。

築かれたる養育院——今丁度故侍従の爲に獻堂せられたる養育院には火事が起つたのである。

その火の輝きあびてオスワルドとレシナが立ち其の間にヘレンアルビングと哀れなる當惑顔の牧師マन्दルスが佇立つてゐる。此に総ての過去即ち神に獻けたる凡ての物を破壊し——火の手は騰つて虚偽のために骨折られたる慣習的建築の影は消失し去つたのである。

丁度嘗て雨の晨の冷き霧深き光を浴びし幽靈……今夜燃へつゝある建物の光に輝ける二人の戀人の場合に於けるが如く、彼女は怕しき避けがたき吾らの中に住める力なる運命の存在を感じたのである。幽靈が彼女を遮り、幽靈が彼女に譬いたのである。

オスワルドが北國人の見界なる虚なる義務の論據をのがれてから久し間のことである。彼は失望しながら叫ぶ

『絶えず降り荐る雨はこのやうに幾週幾日續くのだらう……一つの日の光もなくて。是の故郷で太陽の顔見たことは未だ嘗て俺れの記憶にはない！』

彼が母とノルウェーのことに就て話すのに、
『此には樂みも喜びもない。製作品を完成しあげした満足しんぞくの感もない』と
また、

『誰でも勞働を呪詛のやうに感じて出来るだけ早々と通り越さるゝとしますね。此處の人生はどうしても熱傷の谷としか想へませぬ』

そう云つて彼れは北方の基督教徒の國と南方の邪教徒の國との見界を比較する

『私が働いてゐた周圍では人生と云ふものは明るくて。色彩に富むだ歡樂の經驗としか思はれなかつたのです。お母さん。私が繪いた總てのものに皆な歡樂世界の生活がてゐるのを氣づきでありませんが——いつも、いつも明るい世界が。私が住んでゐた世界では永劫に太陽の光。照り輝いて哄笑と悅樂の幸福に満ちてゐました。是の故郷に殘居るのを畏るゝのは慙う云ふ譯からです』

『恐るゝつて、何を恐るゝの？』とヘレンは尋ねる。

『^{からだ}身体の内^{から}に沸騰してゐる總ての力が不行跡にも洩れ出はすまいかと思つて怖いのです』

『不行跡に』と彼は心狂しくも言つたのであらう。

最後の幕で段々と光景が高うじると恐るべき現實が暴露せられ、人性の心的道德的性格が如何に遺傳力の壓制の下に搗碎せられるかを感ぜしむる。現今のあらゆる偏見から釋放せられ、科學的教育を受けたる人の良心も是の盲目な默せざる力と戦ひ——遂には一步を譲らなければならぬ。

斯かる活躍たる力は、眞理の光に浴ひてゐるにしても近代人世觀の最後の撐材をも破碎し去るの下である。母はかの彼放蕩的性質即ち狂癲の遺傳を有する子息に父の放肆な節度なき生涯を辨明し殆ど嘆願的に夫の作れる罪に對しての眞恕を乞ふのである。

彼の父の不行跡はかの恵み深き伉儷と德望あるマンデルスの間にゐて幽暗な北國の天が下に出口を見出し得なかつた人生の自由なる力の發展に過ぎなかつたとヘレンは説明したのだかオスワルドは耳も傾けてゐない

のに氣付いだ。

オスワルドは母に告げる。『私は父親を好^{すか}ない。また一度も愛したことをすらない。父親が甚^{さん}麼人間であらうと私には何でもない。また其^{そんな}麼事を云ふ貴女がまだ失望しながら頑固に纏^{くっ}著てゐる清かな虚偽に付いて私の程かな非難をわざしなさるのです』

『母さんにとつては恁^{そんな}麼古風な偏見に纏著してゐるのは無用ぢありませんか』

『それでは實際偏見にすぎぬと云ひかね』

『猶能くあるクラスの人に見つかることのある見地でさ。而も皆似たり寄つたりで……………』

『幽霊！』とヘレンは彼の言葉を結ぶ

『さう、さう！實際妖怪とも幽霊とも云ふ可きものでせう』

猶一つ最後の幽霊が残つてゐる。それはオスワルドのヘレンに對する愛、子の母に對する愛情である。彼は一度ならず二度ならず狂癪^{アツキツク}の襲撃の接近を感じたと母にのべる。そのことを想ひ出しては青白くなつて

『It is revolting! わゝ再び幼児にしようと叛逆を續けてゐる。餌じきになさうと、なさうと……………
……………叛ふのだ！』

『幼児はいつも監督してくれる母さんをもつてゐるものですよ』
オスワルドは突然起上つて。

『否々。正さしく私の望むのはそれではありません。長い年月此處に横たはつて老耄れ、なほウロツいて貴母に先立れるてエことは考へるに堪へません』

彼は長椅子に母近く腰を下して

『突然非業の死を遂げるだらうと醫師は宣告して呉れました。頭腦の柔弱かさうでなければそんな性質の病氣の性でと言つたのです……………』

ヘレンは震ひながらオスワルドの倦れきつた^{あはれ}顔子な笑を認めた。彼れは續ける。

『頭腦の薄弱。妙な名前の病氣ですね。さうではありませんか？　どこかかう優柔で軟弱な見なのいゝ暖かい影をもつ絹の掛布を想出させるのですね』

『オスワルド！　オスワルド！』ヘレンは叫び出した。而し最早あまり手遅である。

彼れは襲撃がまもなく否怖らく今直に顯れて凡ての望が消失せはしまいかと室中を上へ下へと早々と歩み初めた。

ヘレンは最早彼の克己心は漸々失はれ行くものゝやうに感ぜられた。彼は遂にポケットからモルヒネの罎を取り出して發作接近の場合には用ひさして呉れよと母に迫る。

『お母さん。モ一度用ゐさして戴だかねばなりませんね』

『妾——お母さんが……………おまへに興へた生命を是の妾が取り去らねはならぬとかい？』

『決して生命をご御願した譯ではありません。それにお母さんは一對ごんな命を呉れたのですか……………欲しいものではありません。要りませぬお取り返しなさい！』

Isaence of Existence を代表せる最後の幽霊は熔け去り消え失せて今は唯神聖なる母の愛である。

ヘレンは救ふ可からざるに至らば他に解決なきを認め彼を殺さんと約束して誓のために手を與へた暫時の間彼より静寂になつた。女は慰めんとは試みはしたものと彼の議論を恐れるとは想はなくて唯眠に入らしめ少さは小供のやうに待遇らつた。

『もう。そろ發作は御覽の通り歌むでしまつた善くなつた——善くなつたことだらう、御覽。まア何と眩ますやうな日光だこと！ 甚麼に周圍りの景色が變つたか御覽よ！』

彼女はテーブルの所に歩み倚つてランプを消す。眼前景色の後地より突立てゐる氷河や山頂が次の戸の橙、殖所の窓を通じて燦として輝いてゐるのが見ゆる。突然長椅子に坐せるオスワルドが

『お母さん、太陽を下さい！』と叫び出した。

彼は全く虚衰して筋肉は畏縮し顔容は空虚に Expressionless に變じて眼は動かなくなつてゐた。母は前に跪いて手をとつたが認知することもなく弱聲で “The sun………The sun” と繰返してゐる。彼の女は蓋ひかぶさるやうに、手に毒をとり恐怖に満ちながら此の無目的で且つ恐しきまで苦痛なる人生を與へける彼を放棄しやうと誘惑と戦ひながら立つた。——彼に死を與ふる爲に誘惑と戦ひつゝ………オスワルドは少しも動かないで感覺もなく唯 “The sun………The sun” と囁くのである。

是れはノラが彼女の子を棄てたる所以で以て咎責する、神聖なる家庭の基礎の嚴めしき熱心なる左祖者に對する最良の答である。

ヘレン・アルビングはノラに反し家庭の爐邊とその兒輩に歸來して讓和を遂行しやうと、試みたものでオスワルドは其の合宜なる虚偽の生みける子で且つ現今社會人の心に明白なる寔大で臆病な人世觀裏に人知れぬ背徳者の生みける子である。

彼れは斯の如き死に運命づけたる此の世界自身の第一の犠牲者として窮死したのである。

イブセンの他の多くの劇作に於けるが如く是の著作に於ても彼は神秘主義者で同事に自然主義者である。堪へ難き敵として彼は是の墮落論者の進路を作出したのであるがそれに就て科學的分拆に身を委ねるやうのことはせなかつた。

人生の反抗的勢力——創造力に於て何等の門戸をも有せざる天才の力——が如何にして罪惡と文盲に依て束縛せらるゝか又如何にして遺傳の法則が “machine work” マンデルスの如き有徳なる、仁慈なる虚偽者に響するかを教示するのはイブセンに取つては虚である。空である。實にマンデルス自身が唯オスワルドの頽廢の自覺なき想ひがけなき原因である。此の見界よりせば誰と云つて聊かも咎む可きものはない。是の詩人は吾人に限りなき人生の範圍を持ち來し眼前に於て現實世界の悲劇を開展したのである。ヘレン・アルビングが吾々は「墓から浮び出た幽霊のやうなものではあるまいかと思ひますわ」と周章して預戒せし所のものは無益なものでない。

オスワルドは不運と一所に生れ誕生日から其の死に運命づけられたるものゝ如く悶えたのである。

古典派の詩人が “FATE AND DESTINY” と呼んだる同じき人生の悲劇を「戀の喜劇」に於ける二人の戀人ファルクとスバンジルタとは經驗して悲哀を感じ生命を絶ち永遠に是の生を去つたのである。而してノラは實際的

現實的目的のために非ず、眞人生より今少し高き物の名を、當達すべからざる自由の題目の下に彼女の夫と兒とを放棄したのである。

またイブセンの著作中に於ける此の悲劇は最も高尚なる美と境と接してゐるのである。なせなれば吾人を破壊する人生の絶望と情火雨つのために破壊せらるゝ間の價值を描述してゐるからである。此の詩人は到る處に現實世界の狀態は唯此の地上の束縛の上に禁錮し得べきものではないと、云ふことを吾人に示してゐる。——譬へ彼等が望みなき争鬭の結果となり、またはプラトウの意見にその範圍の大部分を吸入せられて同一物となる、熱望家の絶望の結果にならうとも。

イブセンは如何なる美學上の定則にも屈服するのを厭がる藝術家である。彼れは戯曲の描作に於て古典的であり詩的感情の深みに於て夢幻的であり近世社會の大膽なる描寫に於ては自然主義者である。

而し、もし吾人にしてモット精密に是の詩人の性格を観察し、合せて彼の眞實なる釋義を企て得たのこそはイブセンはプロテウスの如く最も變化に富む形を取りはするものゝ、自然主義でも夢幻主義でも乃至は古典主義でもない彼の基本的性質を保つてゐると云ふ斷案に當達するのであらう。

イブセンは詩に於て社會に反抗したが彼の哲學的理想主義は論理と、十九世紀初始の詩人——ゲーテ初代の作及バイロンに感得したる自由理想の同じき感激との傳來の結合の中に根據を有してゐる。

其々に永遠に相争ひ 互に缺く可からざる密著せる力——智識と信條——は漸次に互の位置を屈するに依て彼等の感化は遠く 遠くの *world* に及ぶのである。人生と詩の力は其の二つの間にある。二つの中の何れ

たりとも他の物を壓倒し打ちつことは出来ぬのである。現實主義の一時の勝利は次に止むを得ず理想主義の爲に道を開かなければならぬ。途中に起る潮の高ければ高い程次來する干潮の度は更に深い。知識が必然的にどこか信條の放肆なる要求を増加すること破壊が創造と理想とに渴ける現實の放肆なる欲求を増加すると一般である。

ヘンドック、イブセンは其の永遠の反抗と古き神の否定にかゝらず、建設的の哲學的、藝術的制作者として吾人が現在時に於て經驗しつつある所の破壊的性質の論據より有せる大なる智識反働の先達の増進者で最も熱心なる者の一人である。

附 言

譯文晦澁措辭粗雜、原著者を辱めた罪と諸子の頭腦削減の責は、予輩の一重に寛恕を乞ふ所である。且つ譯者は多大の狡猾を弄した。篇中諸所に引用せられたる會話は Archer 氏の譯に依て少なからぬ改削(2)を加へたのである。抑も是の Marejkovoli の幽霊は梗概としてにさまで成功せるものでないとは云へ劇中の重なる會話の引證に依て厘が千數頁の中に劇全体の影を想はしむる其の手段は老功である。此の文ではオスワルドの戀人でまた異腹の兄妹であるレジナの最後が明でないが彼の女は三幕目で『貧乏な娘は若い時に甘くやらないと駄目です——妾だつて『生の喜び』がありますもの奥様』と云つて、生れない前に既に父の爲にその生命を破壊し去られた病弱なる兄と結婚して大膽にも看護しやうと思はない。

『實に人生の悲劇は性格の結果である。而して性格は遺傳なりとのゾラの言葉が染々と想はれる。予輩は

是に到つて學兄草人の『性格と運命』の著作意志を諒とするものである。

『幽霊』!! 幽『霊』!! 口碑にも歴史にもない幽霊である。頽廢的情調を追つて行かうと云ふ自棄的の傲氣。現代を呪詛し冷笑する過去憧憬の無關心的傾向。受けず與へざる者。一切萬象の誇張せる否定に一時の快を貪る虛無主義者。幽鬱なるデカタンの醒顔。是れ皆舊信仰衰へて新信仰起らざる現今の渾沌たる過渡時代に於ける幽霊の仕業である。卑近の例を上ぐれば及物としての親子喧嘩はこの幽霊の朝飯前の一呼吸である。斯くして悲しくも人生の熱愛者は日々に削減せらるゝのである。

想ふに現代人は餘に理屈張である。放散の狀態に歸せんとする水蒸氣の如く現世は個性分裂の世である。空疎なる主觀の動搖に猶も寂しい一人旅を續けんとしてゐる。充實せる主觀と強烈な個性とを有する人間は幽霊の零圍氣の中にあつても内界の豊富なるがために外界の侵入と幽霊の湧興すべき餘地を與へないのであるが、總てに薄弱なる遺傳を有する代表者オスワルドの如きは如何ともせんすべなき怕ろしき運命に弄ばるゝのである。

彼の最も苦しい特兆は自己體質の缺憾や破綻を自ら知るやうになつたことである。彼にとつて「己れを知れ」どの提供は聽て死の問題である。

缺陷を感じることの少ない生活から遺傳性の缺陷を認知した生活。即彼の社會と云ふ暗室を透して視得し自己存在の自覺は著しく女性的ヒステリカルな氣分に陥らしめ男性的の不穩な發作もその反働としか見られなかつた。彼の自己を救はんが爲めにはレジナと巴里に走つて明るい歡樂郷にデカダン云ふ幽霊的產物の血精

療法を受けねばならなかつたのである——がそれも疑い殆ど死の他に道がなかつたのかも知れだから悲劇である。

『幽霊』——幽霊は理智の眼を開かした文藝復興時代からの産物である。幽霊の泊つた生活は頗る冷笑的で皮肉である底深く潜む熱烈の氣を缺いて動搖不滿の心を暗示するからである。近代人の人世觀はあまりに一本調子になりすぎた。大切な補足の精神を忘れてゐる、近代思潮の自然主義だつて一本調子で剣呑な氣がする。自己補足の精神は大體に於てロマンティックの精神を有してゐる憂鬱は逃避的傾向を有してゐる夢幻な夜の文學の一面觀のみでなく、天弦が云つたやうに「結局明るい理想的な方面と暗い神秘的な方面である一つは自己を作り増し一つは自己を蔽ひ隠くすものである」

吾人は自我補足の精神を忘れたくなく思ふ。即ち今少し神秘的、超現實的の力の補足をまつべしと辨するの下望む所は精神的超感覺的の刺激と宗教的憧憬の心である。さあれ悲しきはオスワルドの運命である。彼の生や死や遺神性の奔放なる力の弄物である、彼の創造的眞自我は外界内界の怕き可き力に壓倒せられたのである。彼こそ生も死も有せない闇の人間に立てる不可思議なる運命の象徴其の物に外ならぬのである。

Und so lang du das nich hast, dieses Stih and Worte,

Bist Du nur ein truer Gast auf der dunklen Erde.

——Goethe.

(完) (十月二十三日程)